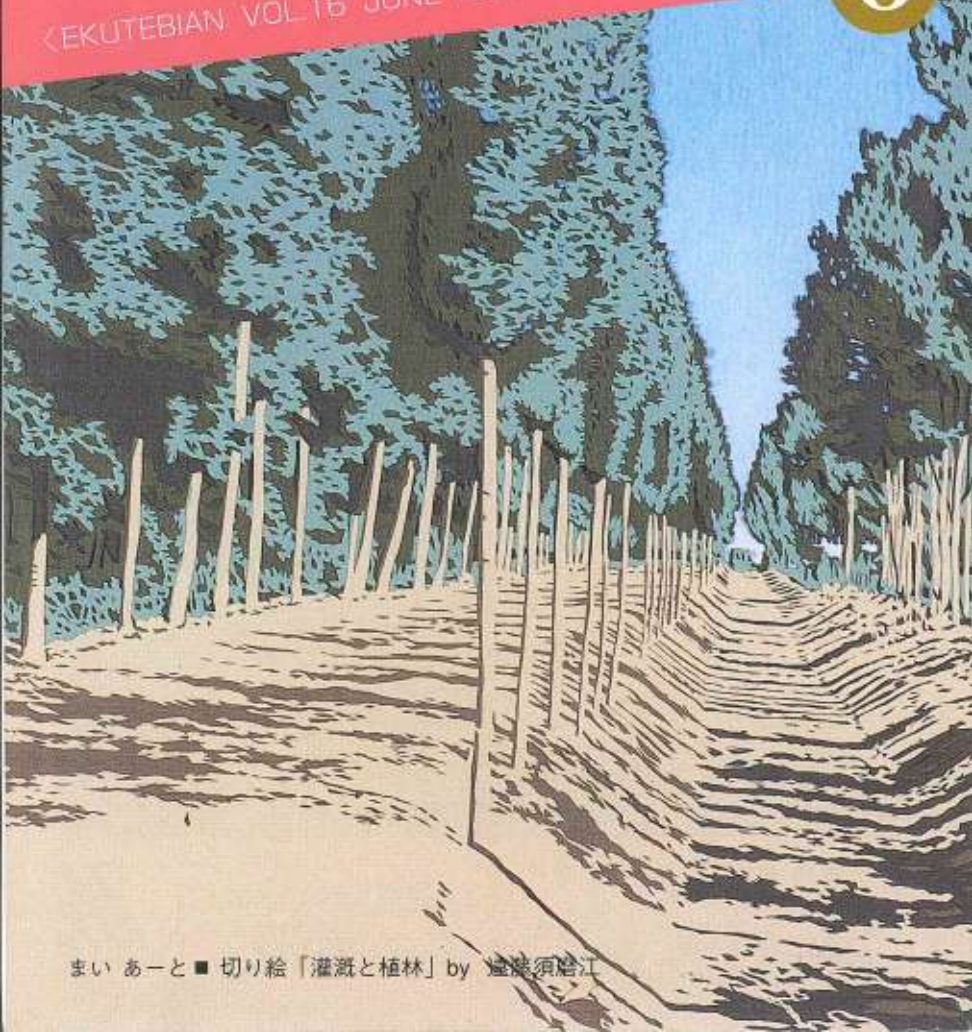
月刊

立川と語ろう　立川に生きよう

# えくてびあん

6

〈EKUTEBIAN VOL.16 JUNE 1998 EKUTEBIAN〉



まい あーと ■ 切り絵「灌漑と植林」by 遠藤須磨江

たちかわの石仏たち⑤

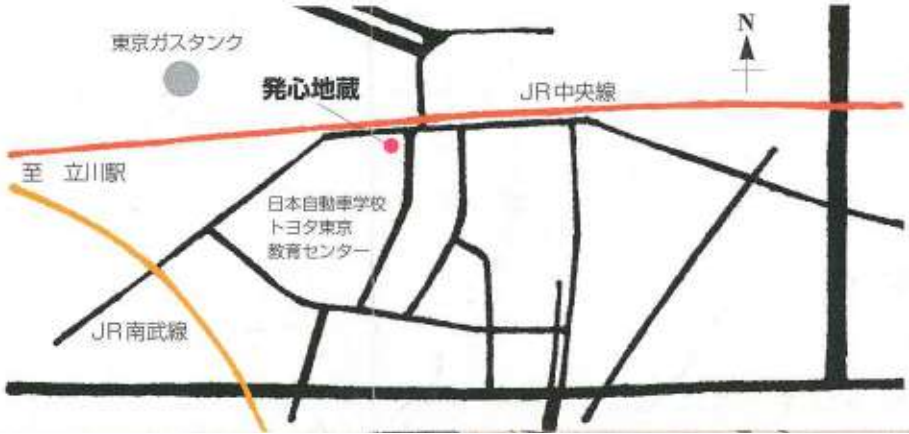
# 野沢踏切の『発心地蔵』

羽衣町一丁目、日本自動車学校の北東側に中央線を横切る「野沢の踏切」があります。かつてこの付近は寂しい松林や畑ばかりで鉄道事故が多く、この踏切は「魔の踏切」と呼ばれていました。昭和九年、大工職の房宗弥造さんのお弟子さんがこの踏切で事故に遭い、亡くなりました。その供養のために房宗さんが発起人となり、翌年、ここに交通安全祈願の「発心地蔵」が祀られました。

昭和二十年四月に立川を襲った空襲で、このお地蔵さまも戦災にあわれました。昭和二十二年、房宗さんと有志の方の手で再建されたのが現在のお姿です。

曙町と羽衣町の境にあるこの踏切は、近年ますます交通量が増えています。日に幾度も降ろされる遮断機を、小さなお地蔵さまは、昔と変わらぬ眼差しで見つめています。

立川民俗の会　中島玲子さん・談




●所在地：羽衣町1丁目（日本自動車学校北東側）
●建立：昭和10年（昭和22年再建）

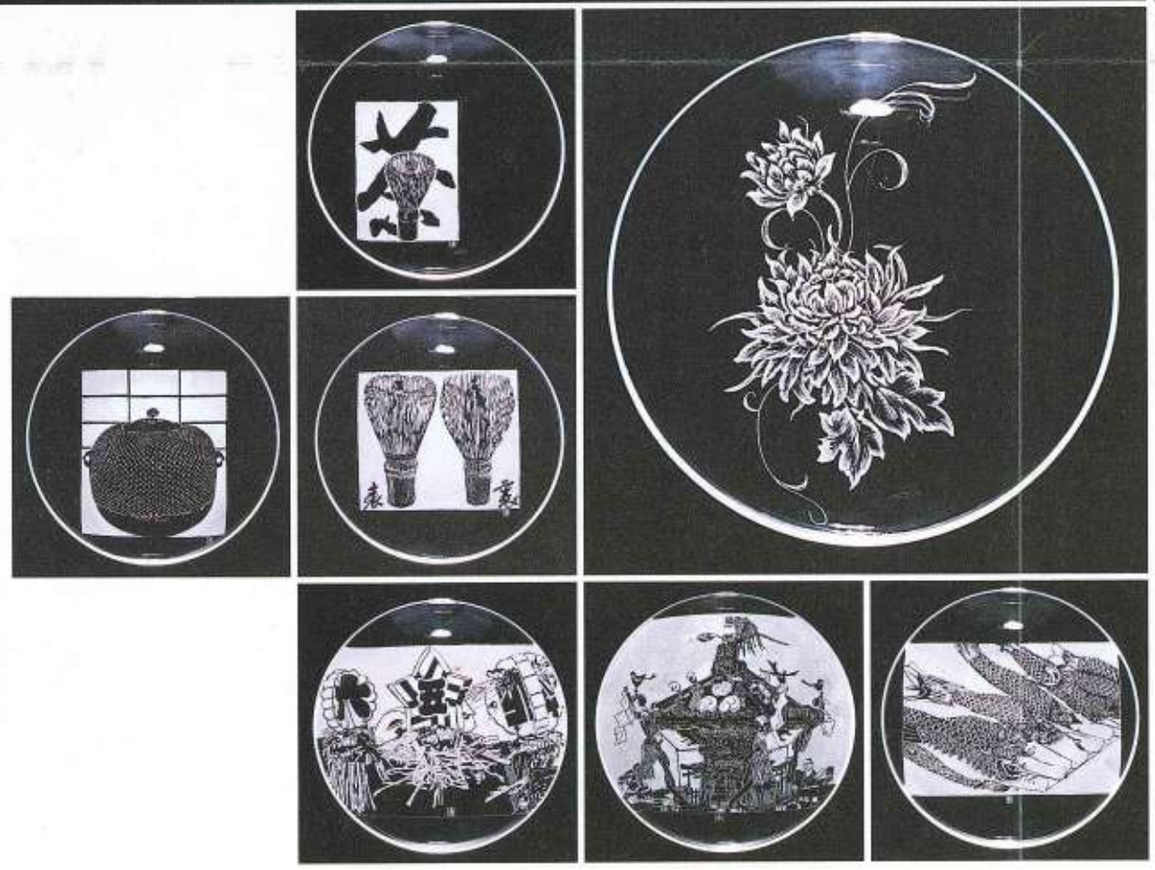
# ガラスを彫る人

何の変哲もないガラスの器に、野島勇司さん（富士見町２丁目）は絵柄を「彫」る。

観賞用ではなく、食器として暮らしに息づかせたい、そんな想いで作品を手掛ける野島さん。だから、自分のしていることは「芸術（アート）」ではない、という。

でも、眺めたり持っていたりすることで、幸せな気持ちになるモノを創る人を、「アーティスト」と呼ばずして何と呼んだらいいのだろう。

野島さんは、アーティストだ。



**野島勇司さん**

1947年生れ、50才。美術学校を卒業後、イラストレーターとして活躍していた野島さんは、以前から“ガラス”という素材に魅せられていた。ガラスの食器を陶器や磁器と同じように「日本の生活」に溶けこませたいと、現在の製作スタイルを考案したのは10年ほど前。この道一本に立ち２年半になる。

富士見町２丁目に奥さまと愛猫「柿エ衛門」の三人暮し。

幸町
いなげや 立川幸店 幸町1-23-6 537-1820
花奴 すずかけ通り店 幸町3-17-3 536-8785
ロッテリア 立川髙川九番店 幸町4-38 537-4413
たちばな 幸町5-2-16 537-0347
BSタイヤショップ 佐藤商会 幸町5-10-2 537-0912

柴崎町
カフェべる・こむーね 柴崎町2-2-7 529-7800
寿司由 柴崎町2-2-8 522-3733
関田酒店 柴崎町2-2-17 524-2960
ビストロすぎ浦 柴崎町2-2-23 525-9929
ラ・バンバ 柴崎町2-3-3 524-5800
クワトロ 柴崎町2-3-3 528-2983
キャノン01ショップ 柴崎町2-3-6 528-1501
コミュニティ・ストア はなむら 柴崎町2-3-9 522-2491
ユウ都市企画 柴崎町2-3-13 528-2566

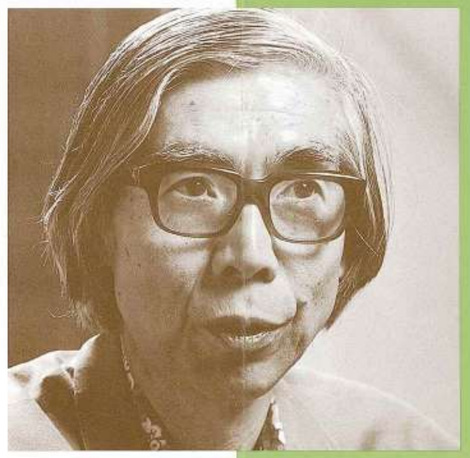
柴崎町
コマツホーム 柴崎町2-4-6 525-5811
喫茶 キャリー 柴崎町2-4-7 528-2630
かみゆい処 わ 柴崎町2-4-8 522-8202
芹沢ガラス店 柴崎町2-4-8 522-3065
小室園 柴崎町2-4-8 522-2894
カフェレストラン ほまれ屋 柴崎町2-4-15 526-2232
ファッションハウス ほまれ屋 柴崎町2-4-15 525-2788
オーロール焼きたて 立川店 柴崎町2-4-15 527-9473
ぼだい樹 柴崎町2-4-18 528-0556
北京大飯店 柴崎町2-4-19 522-6393
ななや 柴崎町2-4-22 525-6980
田中星美堂薬局 柴崎町2-5-3 522-3913
菊川園 柴崎町2-5-6 526-2035
cafe コロラド 柴崎町2-5-8 526-2285

# 定年後の「学問」。私にとっては「当たり前」の事なんです。

シリーズ この人と1時間⑪

## 大澤　清さん

東京都立大学哲学科１年生



◆大澤　清（おおさわきよし）：昭和９年３月生、生っ粋の立川人。昭和32年、明治大学を卒業後、音響器機会社に就職。その後、証券会社に移り、平成６年に定年退職。人間の本質的な在り方を見究めたいと宗教哲学を学ぶことを決意し、今春、東京都立大学哲学科を受験、見事合格した。来年はさらに大学院への受験を準備している。登山、海外旅行など趣味も多く、立川市シルバー人材センターではかつての経験を生かした活動を行うなど、第三の人生をアクティブに生きる“万年青年”。

柴崎町１丁目にお住まいの大澤清さんは、今年64歳になる。証券会社を定年で退職したのが４年前。そして今年の春、大澤さんは受験に合格した。そう、大澤さんは現在、哲学を専攻する“大学１年生”なのだ。さらに来年には宗教哲学を修めようと、大学院受験に挑戦することも計画しているという。多くの人が「定年後」の問題を抱え悩み苦しむ中で、大澤さんは軽やかに次のステップへと移行する。何ともワクワクする話ではないか。

登山、旅、書、そして哲学。たくさんの“やりたいこと”を次々と実践してゆく。変わり者扱いされてしまうとは本人の弁だが、話が進むうちに、実は大澤さんの生き方の方がずっと「当たり前」だと感じてくる。その証拠に大澤さんの瞳は、その辺の若造が束になっても敵わないくらいの「輝き」に満ちているのだ。

**内藤**　今日はいつもの立井が都合がつかず、私が代理でやって参りました。大澤さん、どうぞよろしくお願いいたします。

**大澤**　こちらこそ、よろしく。

**内藤**　先ほど、ご挨拶をさせていただいた時に気がついたんですが、大澤さん、とても良いお声をされていますよね。

**大澤**　実は大学の頃、合唱団に入ってましてね。実際、歌手にならないかって誘われたこともあるんですよ（笑）。

**内藤**　お声を聞いた時、六十を過ぎた方だとはとても思えませんでした。

**大澤**　声がね、前に出ているうちは健康だなって思ってるんです。

**内藤**　いかがですか、二度目の学生生活は。もう授業は始まってるんでしょう。

**大澤**　ええ、すでに三回ほど講義を受けました。最初、教室の場所を迷ってしまって学生に訊ねたんですよ。そうしたら「先生のくせに知らないんですか」って言われちゃって（笑）。

**内藤**　先生と間違えられてしまったんですね（笑）。

**大澤**　僕は学生なんだよって言ったらビックリしてました。

**内藤**　私は非常勤で短大の講師をしているんですが、授業中にも関らず平気でお化粧を直してたり（笑）、今の学生の姿に驚いちゃう時があるんです。

**大澤**　僕も、ジュースを机に置いて講義を受けてるのがいたのには驚いたなあ（笑）。まあ、我々の若い頃と似たり寄ったりのところもあるんでしょうけど。僕の「同級生」は、ほとんどの子がこの前まで高校生だったわけですから、まだ本気になってないんでしょうね。でも、楽しくやっていますよ。昔、塾の講師をやってたこともあるんで、若い人と話すのも全然苦じゃないんですよ。意見を交換したりして。さっきの話ではないんですが、すでに「センセイ」なんてあだ名までつけられちゃって（笑）。自分の目線をずーっと下に、若く持っていってね。

**内藤**　大澤さんは定年でお仕事を一区切りされて、それからまた、大学まで行って勉強しようとされている。そのエネルギーはどういうところから生れてくるんでしょうか。

**大澤**　僕は若い頃から「皆と同じ考えは持たない」ということを心掛けてたんです。確かに周りと一緒に、同じレールに乗っかっていけば楽なんですが、でも自分はそうはならないぞって。だからどうも周囲から見ると、風変わりというか「変な人」と思われてるみたいなんだな。異端児扱いです（笑）。

**内藤**　変わってる人とか。

**大澤**　ええ。でも僕がやっていることは自分できちんと理屈づけができることだから、ウチの者に言わせると「まだ許せる範囲内」だそうですよ。

**内藤**　許せる範囲内ですか（笑）。でも多くの人が、いわゆる定年後の人生について考え込んでしまったり、路頭に迷ったりしている例を聞きますよね。

**大澤**　そうですね、本当に定年というのは切実な問題で、人生の大半をかけていた仕事から、いきなり放り出されるわけですから、悩む人はたくさんいるねえ…。

**内藤**　最悪のケースになると、自ら命を絶ってしまう方もいる。そんな「定年＝終わり」というイメージが強い中で、大澤さんほど鮮やかに、新しい生き方を見つけられる例は少ないと思うんですが。

**大澤**　考え方としては「自分」というものを確実に持っているかどうか、そこがポイントだと思うんですね。仕事や会社といったものを基準に考えるのではなく、自分自身の在り方を見つめるということとでしょうか。自分を振り返ってみるということは、人生の中の「必要条件」だと思うんです。でも現代は、中々それができていないからね。

**内藤**　大澤さんがこれから大学で哲学を学ぼうとされているのも、その「自分を見つめる」ということとつながるんでしょうか。

**大澤**　直接のきっかけは鈴木大拙の本に出会ったことなんですが、僕が研究しようと思ったのは「宗教哲学」なんです。現代、あるいは現代を生きる人にとって、とても重要な分野ではないかと感じたんですね。五年かかるか、あるいは十年かかるかは分かりませんが、本質をつかめるまでは深めていきたいですね。

**内藤**　十年ですか！

**大澤**　そんなに簡単にわかるとは思ってませんから。今はまったくの入口ですが、そのぐらいかけて、やってみたいですねえ。僕は定年まで証券会社にいたんですが、中にいた時につくづく「汚れた世界だなあ」と感じていてね。それはどんな職業にも共通していることなんですが「嘘」がまかり通っているでしょう、世の中には。

**内藤**　ええ。私たちも大なり小なり、それを認めてしまっていますよね。でも物事を円滑に進めるために、つく嘘もありますよね。嘘も方便というか。

**大澤**　方便っていううちなら可愛いもんですが、何かを曲げてそれが堂々とまかり通っている。そこで生きていくのは辛いことですよ、どこかが歪んでいるわけですから。僕は宗教哲学を学ぶことで、そんな世の中にあって、人間はもっと楽に生きることができるんじゃないかと。その気持ちを多くの人と共有できたらいいなと、そんなことをテーマに考えてるんですね。

**内藤**　私は仕事で若い人と接する機会が多いんですが、さらに幼児期の子供たちを対象にいろいろな研究活動をしているんですね。その中で感じるのは、どんなことでも子供に「強制」する親が多いということなんです。自由工作をひとつ作るのにも、親が脇でこうしなさい、ああしなさいって言って。

**大澤**　ははあ、自分の（親の）ペースに子供を合わせようとしてしまうわけですか。

**内藤**　ええ。そうすると主体性も生まれません。「個性、個性」と言いながら、実はまったく逆の方向に子供たちを向かわせているんじゃないかなと思う時があるんです。先ほどの大澤さんのお話に、自分自身を見つめるということがありましたが、それは言いかえれば「自分を育てていく」ということで、定年をむかえた人ばかりではなく、小さい子供や親たち、すべての世代に言えることではないかと。

**大澤**　そういうふうに言っていただけるのは、とても嬉しいですね。

**内藤**　いろんな嫌な犯罪も、どんどん低年齢化してますでしょう。何か若い人たちの中に、本気になれない空気、諦めてしまう空気が蔓延しているような気がします。

**大澤**　それは逆に言うと、大人の方が既に世の中に対して、諦めているんでしょうね。具体的に言ってしまうと、企業や官庁の権威主義、それに無意識に従ってしまう悪い意味での勤労者精神、そういうものが大っ嫌いなんですよ、僕は。人間を犠牲にして成り立つ社会はおかしい。「自分」を捨ててはいけないんですね。そういうことにしっかり「NO」と言えるように、学問を通じて、もっともっと深めていければいいなと考えてるところです。

**内藤**　大澤さんが「老い」とは全く遠いところにいられる、その理由がわかったような気がします。ところで大澤さんは旅行や登山など、たくさんの趣味を持たれていると何ったんですが、やはりお若い頃から続けられてきたんですか。

**大澤**　そうですね。山はね、大学の時、北アルプスを十日間で縦走したんです。それが山登りを始めるきっかけでした。今もね、女房といっしょにいろいろ出掛けるんですよ。

**内藤**　奥さまもごいっしょですか。

**大澤**　それは素晴らしい（笑）。大澤さんにとって山の魅力は、どういうところにあるんでしょう。

**大澤**　やっぱり自然だね、自然の美しさに触れられるということ。それと、だんだん山登りをしていて「哲学」を感じるようになったんです。

**内藤**　登山と哲学ですか？

**大澤**　ええ。そんなことを考えられるようになるまで、ずいぶん時間がかかってしまったんですが。最初の頃は、山なんて登って降りてくるだけのもんだと思ってたんだけどね、だんだん歳をとるうちに「ここまで来たか」っていう感覚が大事に思えてきて。雲取山に登った時に、思わずヘタな歌を詠んだんですよ。「山入りてひとの心は故郷を想う」なんて（笑）。

**内藤**　頂上に到達してみて、初めて本当の自分を知るってことなのかしら。

**大澤**　山は哲学ですよ（笑）。

## 工房から

先日、立川の空に虹が現われた。その日は夜のニュースで報じられたくらいだったから、「実物」を目にした方も多かっただろう◆外出から工房へ帰る途中、なにげなしに東の空を見上げて、思わず「あっ」と叫んでしまった。こんなに大きな虹は何年ぶりだろう。さっそく工房にいる人間に知らせたところ、それぞれの反応が面白かった。とりあえず窓の外を眺めて「ああ、出てるなあ」と云う者。目の前の仕事に集中して席を立とうともしない者。様々である◆さて、今月の対談は本誌編集人・立井ではなく、内藤裕子さんに聞き手を担当していただいた。内藤さんは主に「子供の立場に立った街づくり」をテーマに研究活動を行っている環境プランナーである。日頃、子供たちと接する機会が多い内藤さんが、定年を過ぎて尚、更に自身の人生を深めようと大学の門を叩いた大澤さんと語る。話が進むにつれ、だんだんと世代の差を超えた「何か」が見えてくるような、そんな対談になった◆終了間際、内藤さんは大澤さんに、いつまでも若々しくいられる秘訣を訊ねた。大澤さんの答えは「どんな小さなことにも感動できる心を持ち続けること」。それは正に、内藤さんが子供たちに伝えていこうとしているエッセンス、そのものであったという◆あの日の虹を大澤さんはご覧になっただろうか。そして立川の子供たちは、あの虹を見てどんな反応を示したのであろうか。

◆内藤　裕子（ないとうひろこ）

環境プランナー。目白学園短大生活科学科講師。昭和60年、東京芸大修士課程終了。（財）環境文化研究所研究員等を経て、平成６年、（有）まちとこどもの環境研究所設立。体験学習、昭和記念公園での“ワークショップ”活動など、子供の目から見た公園づくり、街づくりを基本テーマに研究を行っている。本誌にはライターとして取材・執筆に参加。柴崎町４丁目在住。


えくてびあんの輪

人があって、街があります。
あなたがあって、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は幸町・柴崎町(A)・錦町・若葉町・砂川町のお店です。

柴崎町
マエダ文具 柴崎町2-6-2 525-6584
スタジオ269 柴崎町2-8 527-0269
手造りのお弁当 くりや 柴崎町2-9-3 523-2590
立川高等技芸学院 柴崎町2-9-4 522-3424

錦町
Coffee Shop 遊香 錦町1-4-24 527-3840
ステーキの リブレ 錦町1-8-3 527-1630
和菓子処 ゆうき 錦町1-8-5 525-0780
美容室 アリス 錦町1-15-21 525-1100
うちのやブルマン 錦町1-18-17 524-9280
むぎばたけ 錦町2-1-1 526-0210
池田屋商店 錦町2-1-10 522-3731
美容室 赤い鳥 錦町2-1-10 528-2389
寿屋酒店 錦町2-1-13 522-3625
TAPAS 錦町2-2-29 529-0733

錦町
振興信用組合 立川支店 錦町2-2-32 524-1471
三田花店 錦町2-5-23 524-4187
セガミ薬局 錦町2-7-8 525-9212
マルミヤスポーツ 錦町2-7-8 522-2912
アミューたちかわ（立川市民会館） 錦町3-3-20 526-1311(代)
そば高尾亭 錦町5-5-31 522-2710

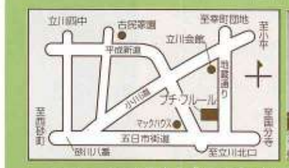
若葉町
ふとんの青木寝商 若葉町1-8-1 536-6833
美容室 リラ 若葉町1-11-1 536-3048
みふじサイクル 若葉町1-12-4 536-7166
紀ノ国屋 立川店 若葉町1-13-2 536-1604
エッソ石油 けやき台ステーション 若葉町2-1 535-3081
いなげや 若葉町店 若葉町3-21-1 537-4199

砂川町
JA経済センター 立川店 砂川町2-44-3 536-1824
JA東京みどり 立川支店 砂川町2-44-3 536-1821

真味百撰⑮

ティールーム プチ・フルール
幸町4-16-1／535-6734／AM11:00～PM5:00
木・日・祭日休／子供連れ不可

自宅の居間をティールームに開放。
本格手づくりのランチとケーキを
「お友達の家で…」感覚で楽しむ



インターホンを押すと「どうぞお上がりください」の声。玄関の扉を開け、靴を脱ぎスリッパに履きかえ、促されるまま廊下を進む。この時点では、まるで友達の家に遊びに来たというような錯覚。廊下の奥の扉を開けると、隣当たりの良い、広々としたリビングに通される。テーブルが数脚並んでいるのを見て、思わず笑みがこぼれてしまう。

この“居構えのない店”、「プチ・フルール」は、もともとが造園業を営む小林正治さんのお住まい。お宅を新築する際に大きなリビングを設けたが、この辺りにはゆっくりとくつろげる店がないことから、「ウチが始めてみよう」（小林さん）と実現させてしまったのだ。砂川の地に二百年以上続く小林家の十代目、正治さん。自宅の居間を開放するというこの発想は、郷土へのひとなら誰もが思いのある人ならでは。

店長は奥さまの正子さん。このために料理学校に通って専門技術を学んだが、あくまでプチ・フルールの基本は家庭の味。ランチもケーキもすべて手作りである。そのため食材は大レストランのシェフにもひけをとらぬ真剣さで吟味する。開店当初は眠れない日が続いたとか。「やるからには厳しくかしくないものを提供しないと」（正子さん）。

週替りのランチは￥800。数量限定なので予約をしておけば安心。ケーキセット（飲物付）も￥800。

思わず長居をしてしまいたくなる店が、またひとつ増えた。



月刊えくてびあん 第167号
平成十年六月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市栄町２-17-５
杉田ビル６F　〒190-0012
電話　〇四二(528)〇〇８２
FAX　〇四二(528)〇〇６５
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

（表紙）切り絵／漫画と遠藤
（編集）池田隆男・小林達史・名尾常良・山田恵子・五条孝平・遠藤浦星江・畠山　理・内藤裕子・中村　伸
（写真）中村　伸



連載　四字熟語（12）

雲外蒼天

「雲外に蒼天あり」という。暗雲の外に出れば、蒼穹（あおぞら）は広く、お日さまも照り、あたたかい。

雲は、さまざまな障害や悩みの意。困難を乗り越え、努力して克服すれば、快い青空が望めるという意味。

絶望してはいけないという激励の言葉。

同意語に、「冬来たりなば、春遠からじ」がある。

立川に育てられて六十二年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel.527-0111(代)

首都圏に拡がる とみん銀行
暮らしに、事業にお役に立つよう努力しています。
とみん銀行

アムス株式会社
心を贈るお中元
ジョイフルプラザ
SUMMER GIFT
ご贈答品各種取り揃えました。
地方発送も承ります。
●京の銘菓から輸入小物、香りのグッズまで●
バラエティーショップ ジョイフルプラザ
JR立川駅南口諏訪通り ☎529-2772

# 私の立川原風景 第十一回

吉岡ひろ（錦町）

◆ 砂と子供 ◆

四十年前のこの辺（錦町）は麦畑や桑畑が広がっていて、舗装されていない私の家の前をバスが通っていました。すぐに息子たちが産まれ、かつての錦郵便局の近くに公園があって、私の家の二階から子供の遊んでいる姿が見えて安心したものです。ある日、トラックで砂場に砂が運ばれてきました。子供達がワーッと集まってきて大活躍。その時の有り様をレリーフに作り、石膏にして上野の美術展『創型展』に出品。その後、二十年以上経ってブロンズにしたのがこの作品です。今は家が建ち並び、子供達の遊ぶ場所もなくなってしまいました。これからの子供達の原風景となる場所を残しておきたいものです。

（彫刻家）